

【学校教育目標】 夢に向かって 自ら学ぶ 豊かで たくましい生徒

黒西中だより



TEL 048-768-5454

心のホット相談室 TEL 048-764-1110

<http://kuronishichu.style.coocan.jp/>



第 6 号

令和7年10月1日

生徒数		
1年	68名	2学級
2年	85名	3学級
3年	83名	3学級
4組	3名	1学級
5組	3名	1学級
合計	242名	10学級

おもてなし

異常な暑さの夏も終わりを告げ始め、秋の気配が時折、感じられる季節となりました。10月には運動会と合唱コンクールという大きな学校行事があり、子ども達はクラス全員で一致団結してよりすばらしいものしようとがんばっています。

私は夏休みに泊を伴う旅行をしました。そこは完全に観光地化されていない隠れた名湯でした。ホテル周辺の散策マップに神社やカフェ等がありましたが、山中の道も最低限の安全が確保されている程度、とある神社への道も閉ざされていて行けない等もありましたが、そのようなありのままの趣がかえて魅力的でした。もともと湯治場で身体の保養が目的であり、近くに病院もある場所なので、周辺の観光地化が積極的に進められていなかったのではないかと推察します。

そのような場所に立地していたホテルですが、朝食・夕食共にビュッフェの食べ放題、館内には温泉、無料で使用できるプールとトレーニング・ジムが完備という心身のコンディションを整えるには最高の宿泊場所でした。食事制限や体重制限をしなければいけない私は、食べたい物を食べただけ食べるという欲望と戦わなければならない、さらに食べた分だけ室内の設備で運動したり、外出して散策をしたりしなければいけない日々でもありましたが・・・。

とはいえ、朝夕のビュッフェは魅力的で比較的野菜がふんだんに使われた料理も多く大満足でした。さらに私が感銘したのはそこで働いている若いスタッフのおもてなしです。ビュッフェ方式なのでトレイを自分で取り、仕切りがたくさんある平皿を取って自分で好きなだけ料理を取りテーブルについて食べます。取ってきた料理を全部食べ終えたら自分でトレイごと片付けて、また、新しいトレイと皿を取り料理を取りに行きます。これをお腹がいっぱいになるまで繰り返すわけですが、取ってきた料理が食べ終わるとその様子を見ていた若いスタッフが「お皿をお下げいたします。どうぞ、新しいお皿をお使い下さい。」と自らテーブルに来て食べ終わったすべてをトレイごと、持って行ってくれたことが何回もありました。取ってきた料理を食べ終えお腹もこなれたので、「もう1回取りに行こうかな。」と思ったまさにその時に、声をかけ持って行ってくれます。経験が浅い若いスタッフの場合、声をかけてくれるのはいいのですが、微妙にまだお皿に料理が残っている時に来る時もあります。そのような時に「お皿をお下げしましょうか。」と声をかけられ「あ、まだ少し残っているものでちょっと待って下さい。」と言えばいいのですが、どうも私は「はい。どうぞ。」と言ってしまいます。「このお客さんはほんのわずかに残っていてもまだ食べるかもしれないから、少し待とう。」というのは、ある程度の経験と1人1人のお客さんに対するさらなる洞察力が必要だということでしょう。

さらに感動したことがあります。それはせいろに入っている桃まんじゅうを取る時でした。甘い物を控えなければいけないのですが、おいしそうなネーミングの誘惑に勝てず、せいろから専用ばさみで取り出そうとした時です。「ちょっと取りづらいな。」それは持っていたトレイを置くスペースもなく、せいろのふたを開けてどこかに置くスペースもありません。私は片手でトレイを持ちながら（すでにたくさんの食べ物が乗っている状況です。）ふたを少しだけずらして、中の桃まんじゅうが1つ取れるくらいのスペースを作り取ろうとしました。するとすぐ近くにいた若いスタッフが（そこにいたのも気づかなかったのですが）すかさず「蓋を開けましょうか。」と言って片手で蓋を持ち完全にせいろを開けて取りやすくしてくれました。私は「ありがとうございます。」と言って桃まんじゅうを一つ取りました。そのスタッフは私の様子をずっと見ていたのか、その状況を瞬時に見て、そうしたのかはわかりませんが、まさに私がその時、そうしてほしいことをしてくれました。

おもてなしは難しい面があります。「良かれ」と思ってしたことが、必ずしも相手にとって欲しかったことかということやそうでない時もあります。「何をしてもらいたいのか、はっきりと言葉に出さないとわからない。黙っていてもわからない。」という場面もあるでしょう。人は本音をなかなか口に出せないものです。相手が本心として何をしてほしいのか、あるいは何をしてほしいのか、それらを正確に察するのは難しいことです。しかし、いつも相手のことを気遣う心もち、様々な経験をすることで、自然に身につくものなのかもしれません。私も「桃まんじゅうのせいろの蓋をグッドタイミングで取ってくれたような心遣いができる人間になりたい。」と、桃まんじゅうをほおぼりながら強く思った夏でした。

保護者の皆様、地域の皆様、今後も、本校の教育活動に対して、変わらぬご理解とご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。